

笑顔が集う、三重の地域交流拠点

暑い日も寒い日も、毎日通った小学校。夕暮れまで、友人と遊んだ空き地や町並み。家族と一緒に食事した大衆食堂…。私たちの誰もが、ふとした瞬間に懐かしく思い出す建物や風景があるので、はないでしょうか。

地域の町並みに欠かせない存在だった建物の中には、残念ながら、その姿を消してしまうものもあります。近年、こうした建物を再び蘇らせ、地域の交流や活性化の拠点として活用しようという試みが始まっています。

今回は、新たに地域交流拠点として再生した施設を5か所ご紹介します。そこでは、多くの笑顔と心尽くしのもてなしに出会えるでしょう。

※各施設で開催される教室やイベントなどの予約方法・人数・日時・料金などは、それぞれ異なりますので、事前に必ずご確認ください。

取材・文…中村真由美

撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

かつての小学校校舎で、新たな交流のひととき

桐林館 阿下喜美術室

(旧阿下喜小学校職員室)

【いなへ市北勢町】



かつての職員室の面影を残す「桐林館 阿下喜美術室」

(1981)年の小学校移転にともない、規模を縮小して現在地に移築されました。以来、文化資料保存施設「桐林館」としての役割を果たしていますが、昭和初期の小学校校建築物として貴重な存在であることなどから、平成26年に、門や石柵と合わせて、国登録有形文化財となりました。



「桐林館」外観

「まあ、懐かしいわねえ」「何十年も昔に戻ったみたい」「いいわねえ」...

北勢町阿下喜に昨年オープンした、ギャラリーと喫茶室を兼ねた「桐林館 阿下喜美術室」では、訪れた女性たちの

弾む声が聞こえます。大きな黒板の行事予定表や、温もりのある木枠の窓などが、かつてここが阿下喜小学校の職員室だったことを物語ります。校舎の竣工は昭和12(1937)年ですが、同56

こと。「桐林館」前のグラウンドや商店街全体が会場となり、有機野菜などの食品や、手作りの籠などのクラフト製品を扱う数十店が出店しました。

昔ながらの商店街のたたずまいを残す阿下喜に、帖佐さんが大きな可能性と魅力を感じた、ちょうどそのころ、同館が国登録有形文化財となり、市や地域住民たちの間では、さらなる有効活用法を模索中でした。地域の象徴としてふさわしい、皆が集えるサロンの

ような交流スペースを館内に作ることに決定した時、自らがその担い手になるかと決断し、市外から移住してきたと語ってくれました。

オープン以来、「桐林館 阿下喜美術室」には卒業生たちも訪れ「校舎は昔は3棟もあったんだよ」などと、昔話に花が咲くことがあるほか、木造校舎のたたずまいに引かれて、関東や大阪方面などから足を運ぶ若い人もいます。世代や地域も超えた人々との交



帖佐 真之介さん(中央)、
仲間の水谷 真人さん(左)と打田 浩孝さん(右)



大勢の人々で賑わう「阿下喜 秋ノ市」※



林 伸也(紫光窯)さんの作品

流が楽しいと語る帖佐さんは、これまでに、市内藤原町の紫光窯で制作を続ける林伸也さんの作品をはじめとして、月替わりで、地域内外の作家たちの作品を展示したり、音楽ライブや子どもたちによる能の発表会などを企画・開催してきました。そして現在は、新たな試みが始動中です。「タイムレター」と名付けられた企画で、1年から10年の期間を設定して、たとえば1年後の自分、3年後のパートナー、10年後の子どもなど、未来の誰かに宛てて書いた手紙を届けるサービス。じっくりと腰を落ち着けて、未来に想いを馳せてもらおうというのです。

お問い合わせ

桐林館 阿下喜美術室(月・火曜日休館)
TEL 0594-17216096

※印の写真は取材先から提供していただきました

山里にこだまする、カリヨンの音と子どもたちの歓声

波瀬ゆり館

(旧波瀬小学校校舎)

【松阪市飯高町】



「波瀬ゆり館」中庭にテントを張る子どもたち。※

アマゴやアユなど多種多様な生物を
はぐくむ柳田川、八角銅鐘(県指定重要
文化財)で名高い泰運寺、古くから自生
するヤマユリの「波瀬ゆり」…。

かつて、和歌山街道の宿場町として
栄えた飯高町波瀬には、地域の人々が
自慢できるものが数多くあります。平

成3年に建てられた旧波瀬小学校の校
舎もその一つ。地元産スギやヒノキを
ふんだんに使用した、純木造校舎です。
そんな自慢の学校が、同20年に休校と
なった時、地域の人々で結成した「波瀬
むらづくり協議会」の皆さんが考えたの
が、体験学習の場所として活用するこ

ています。自由に遊ぶこともままなら
ない子どもたちが、豊かな波瀬の自然
と人々の思いやりに触れたことは、か
げがえのない体験となったことでしょ
う。

「私たちが活動の中心としているのは
人の寄る村づくりです」と話すのは、
同協議会副会長の向東克己さん。傍ら
では副会長の大西敏一さん、波瀬ゆり
館部長の増田進一さん、事務局長の寺



川遊び体験で、アマゴつかみ捕りに興じる子どもたち。※



後方向かって左から
大西 敏一さん、向東 克己さん、寺脇 充さん、増田 進一さん。
前方「波瀬むらづくり協議会」里グループの皆さん。



「波瀬むらづくり
協議会」会長の
福本 博行さん

一杯もてな
すのです。
皆さんの
お話を伺っ
ている最中、
どこからか、
「キンコー
ン、カンコー
ン」と澄ん
だ音色が響
いてきました。
た。これも
皆さんの自
慢の一つ。
同館に据え
られた小さ
な鐘塔には、

とでした。「自然、人、歴史、全ての生
きとし生けるものの『生きる』を学ぶ」を
テーマとした1泊2日のプログラムを
各種用意し、毎年12から15団体、約1
200人の子どもたちを受入れていま
す。また、東日本大震災以降は、福島
の子どもたちが4泊5日の日程で訪問。
本年度7回目を迎えます。

山里の木々が芽吹き始めた3月4日、
「波瀬ゆり館」(旧波瀬小学校校舎)を訪
ねると、廊下に貼られた手紙が目に残
まりました。そこには、過去に行われ
た「福島松阪サマーキャンプ in 波瀬」
に参加した子どもたちが星空観察した
こと、柳田川で遊んだこと、アマゴや
ウナギを捕まえた時に思わず「やっ
たー!」と叫んだこと、そして、焼いて
もらった魚を食べると「ほっぺたが落ち
るほどおいしかった」ことなどが丁寧な
文字で書いてありました。また、「みんな
が優しくしてくれましたこと、ぼくも
優しくなれている気がします」などと、
波瀬の人々への感謝の気持ちも綴られ



鐘塔とカリヨン

オランダ製カリヨン4個が吊るされ、
12時・15時・17時に音が鳴る仕組みです。
カリヨンとは、打楽器の一種で、音の
高さを異にする一組の鐘を配列したも
の。その音色は放送で流れるものとは
違い、優しく、耳に心地よく響きま
した。

やがて、季節は「波瀬ゆり」の可憐な花
が咲く7月を迎えます。この夏も「波瀬
ゆり館」には、子どもたちの歓声が響き
渡ることでしょう。

お問い合わせ

「波瀬むらづくり協議会」事務局
(飯高地域振興局波瀬出張所内)
TEL 0598-471-0321

※印の写真は取材先から提供していただきました

おいしい料理と楽しさで、何度も訪ねたくなる

「やなせ宿」

(名張市旧細川邸)

【名張市新町】



中庭に面した奥の間で談笑する皆さん。

花の便りが聞かれるころ、名張市市街地を通る初瀬街道を歩くと、随所で風情ある家屋や蔵などが見られました。江戸時代初期、藤堂高虎の養子である藤堂高吉がこの地に屋敷を構えて以

来、名張は商業の町として発展。名張藤堂家邸を取り囲む8つの町は、名張八宿と呼ばれて賑わったといえます。散策やサイクリングに好適な町並みをさらに進むと、つし2階の木造家屋

が目にとまりました。国登録有形文化財の旧細川邸です。江戸時代末期から明治初年に、薬商細川家(奈良県宇陀市)の支店として建てられました。袖卯達や虫籠窓などが、往時の町屋の雰囲気を与えています。この旧細川邸が、観光交流施設「やなせ宿」としてオープンしたのは、今から10年前のこと。以来、季節に応じて「新春餅つき大会」「名張八日戎祭り」「お雛様 in やなせ宿」「やなせ祭り」「隠街道市 in やなせ宿」など、年間50日以上のイベントが開催され、多くの来館者が訪れます。館長の池田毅さんの案内で館内へ入り、書道や連鶴教室などが行われる和室や土間を抜けると、中庭が現れまし



「やなせ宿」外観

た。想像以上に広さがあり、開放感があります。奥には、なまこ壁が印象的な中蔵と川蔵が建ち、前者は展示室として使われ、この日は連鶴教室の生徒さんたちの力作が並んでいました。また、後者は喫茶スペースとなっていて、ゆつくりと、落ち着いた時間を過ごせると好評を得ています。

さらに2棟の蔵の背後に回ると、光景は一変し、目の前に名張川が姿を現しました。池田さんは「以前は、もっと川幅が広くて、子どもたちが川岸から飛び込んで遊んだものです」と、幼き日々を懐かしむように話してくれました。かつては蔵のすぐ近くを川が流れ、荷物を運ぶ船が横付けされていたのです。なお、古来から名張川はアユの名所として知られ、付近にはアユを捕るた



向かって左から館長の池田毅さん、スタッフの正木(まさき)由美子さん、金井弘子さん、池内雄治さん、事務局の榎本明雄さん。



「なばりこども食堂」※

めの築が設けられていたことや、宿場の賑わいを再び呼び戻す願いを込めて「やなせ宿」と命名されたことを教わりました。今でも、オイカワ(シラハエ)やカワムツ・タニシなどが生息する名張川を眺めた後、再び中庭へ戻ると、厨房やカウンター席が備わった物産棟に気が付きました。ここは料理好きな人や学生、飲食店の開業をめざす人たちが日替わりシェフとなり、ランチを提供するワ

ンデイレストランです。休館日の月曜日以外は開業し、その種類も和食・イタリアン・インドネシア料理など多多彩。毎日来訪しても異なる料理が楽しめる」と評判を呼んでいます。また、月に1度は18歳以下の子どもは無料という「なばりこども食堂」もあると伺いました。この日は、スタッフの一員でもあるシェフの池内雄治さんが、丹精込めて打った、ざるそばと蒸し寿司をいただきます。いつ訪れても、おいしい料理があって、楽しいイベントや教室が行われている「やなせ宿」に、一度足を運んでみてはいかがでしょうか。池内雄治さん



ざるそばの準備をする池内雄治さん

お問い合わせ

「やなせ宿」月曜日休館

TEL 0595-162-7760

※印の写真は取材先から提供していただきました

鳥羽大庄屋かどや (旧廣野家住宅) [鳥羽市鳥羽]



「かどやお針子倶楽部」で着物をリメイクしたストール作りに専念する皆さん。

風雲急を告げる戦国時代、戦国最強の水軍大将として名を馳せた武将がいました。九鬼嘉隆です。嘉隆が礎を築いた鳥羽城下の一面に、江戸時代に大庄屋を務めた廣野家がありました。

当主は代々「藤右衛門」を襲名し、城内には専用の間が設けられていたと伝わります。江戸時代後期になり、6代目が「三徳堂葉舗を創業、明治時代以降は、8代目が「括囊舎」の名前で営業するな

んでいると思います」と、笑顔で語ってくれました。

廣野さんのお話通り、コンサートなどのイベント、手芸などの教室に加えて、夏休み期間中には、朝早くから子どもたちの勉強の場「寺子屋」として開放するなど、常に人々が集う施設内では、この日は、伊勢市の人形作家・阿部夫美子さんの和紙人形展が開催されました。「日本神話の世界」のテーマ通り、天照大神をはじめとした神々を表現した人形たちは、いずれも優美で神秘的。



向かって左から廣野 克子さん、清水 久行さん、久保田 結子(ゆうこ)さん、森 真央さん。



和紙人形展「日本神話の世界」展示風景



「長尾オルガン」

和室に展示されているため、間近にじっくり見ることができました。赤や青などの色ガラスがスタンドグラスのようにはめ込まれた窓や、さまざまな意匠を施した欄間など、建物全体が文化財としての価値を有する同施設では、所有していた山田羽書(日本最古の紙幣)や薬屋を営むために使用した道具類なども展示されています。その中でも珍しいのは「長尾オルガン」でしょう。現松阪市の楽器職人、故長尾芳蔵氏が明治時代に制作した国産オル

ど、鳥羽随一の資産家として知られる存在でした。時は流れ、江戸時代後期から明治時代にかけて建てられた廣野家の母屋や蔵は、平成18年に国の登録有形文化財となりました。その後、修復工事を経て、薬店経営時の様子が再現され、観光・市民交流施設「鳥羽大庄屋かどや」として蘇りました。



「鳥羽大庄屋かどや」外観

ガンのことで、鍵盤の数が39しかないため、「ベビーオルガン」の愛称で親しまれています。現在、国内では3台しか現存しないことから、市の文化財に指定されています。施設内では、この「長尾オルガン」を使った「昼下がりコンサート」なども随時開催され、その音色を楽しむことができます。

「鳥羽大庄屋かどや」の存在は1つの点ですが、点が線となり、さらに線が面となって、広がっていくことが私たちの願いです」と話す清水さん。その言葉通り、同施設の誕生をきっかけとして、市内旧市街地の商店主たちが「鳥羽なかまち会」を結成。定期的に「なかまちマーケット」を開催するなど、新たな活動が始まっています。「鳥羽大庄屋かどや」を中心とした交流と地域活性化の輪は、着実に大きく広がっていくことでしょう。

お問い合わせ

鳥羽大庄屋かどや(火曜日休館)
TEL 0599-12518686

40年以上の時を経て、国内外の訪問客をもてなす

魚まちのたまり場 (旧(旧)食堂) 〔北牟婁郡紀北町〕



向かって左手前から長井 好子さん、喜田(きだ) ちや子さん、大西 光子さん、堀内 久子さん、湊 章男さん、植田 芳男さん。

地域活性化に向けてのさまざまな試みが実施されています。平成25年に散策の休憩所兼交流スペースとして開館した、まちかど博物館「魚まちのたまり場」もその一つ。ここは、40年以上前に閉店した「(旧)食堂」。管理・運営するのは、町の魅力を発信したり、訪問者を温かく案内するなどの活動を続ける「古道魚まち歩観会」の皆さんです。

ある日のこと、会長の植田 芳男さんの案内で同館を訪ねると、予想以上に奥行きがありました。壁側には、ホー



昔懐かしい看板や道具類などが並ぶ「魚まちのたまり場」内部



「かんからこぼし座」上映会 ※

て、地域の皆さんも集まってきてくれました。すると「懐かしいねえ」ここで食べたぜんざいはおいしかったね」「この2階でお見合いをした人もいたよ」などと、数十年の時を超えた思い出話に花が

ロー製の看板や黒電話、古時計などが展示され、昭和の雰囲気を感じられます。和室では、「かんからこぼしと治郎左衛門」に加えて、「まんぼうと殿様」「たかぼっさん」などの昔話を影絵で紹介する「かんからこぼし座」の上映会なども行われます。



「古道魚まち歩観会」会長の植田 芳男さん

この日は、湊章男さんをはじめとして、地域の皆さんも集まってきてくれました。すると「懐かしいねえ」ここで食べたぜんざいはおいしかったね」「この2階でお見合いをした人もいたよ」などと、数十年の時を超えた思い出話に花が

東紀州の玄関口、紀北町の長島港に沿って続く旧魚市場周辺の町並みは、通称「魚まち」といいます。潮風に誘われて町を歩けば、軒先に1年中掲げられた注連飾りや、あえくと呼ばれる路地の途中で、老舗の蒲鉾屋や庚申堂を見かけるなど、独特の景観が楽しめます。また、ここでは海や川にまつわる昔話が語り継がれていますが、中でも390年以上続く旧家の湊家では、かんからこぼし(河童)にまつわる伝説が今に息づきます。伝説とは、初代当主の湊治郎左衛門が、かんからこぼしを懲らしめたことから、一族は決して水難に遭わないという話。以来、1月11日には、同家の当主と地域で生まれたばかりの男児との間で、親子の杯を交わす風習「息子の酒」が受け継がれ、現当主、13代目の章男さんも、毎年約10人と杯を交わしているといっています。

近年、魚まち界限では、閉店していた青果店をお年寄りたちの交流施設「ふらーりフラット」として蘇らせるなど、

咲きました。ここは、昭和初期から同45(1970)年ごろまで、寿司・うどんなどに加えて、季節に応じてかき氷やぜんざいが食べられるなど、地域の人々に愛された食堂だったのです。また、さらに遡れば、大正4(1915)年に建てられた当初は公衆浴場だったといえます。当時の様子は、トタン板が張られた天井が吹き抜けのようになっていることなどから、ある程度、想像することができました。

同会では、近年、台湾やオーストラリアなど、海外からの訪問客を案内する機会が増えたといえます。館内では「Thank you」「kindness」などと、感謝を伝える言葉が寄せ書きされた色紙を見ることもできました。昔ながらの町並みや連綿と続く風習を大切に守り続けてきた町の人々の想いは、今後も国境を超えて届くことでしょう。

お問い合わせ

紀北町観光協会
TEL 0597-46-3555

※印の写真は取材先から提供していただきました